

監國。佞諛用事。信房等之老臣不得志。然忠憤不少怠。天正三年五月二十一日。於參州長篠與信長接戰。先期一日。信房獻三策。詳言交戰之不利以止之。勝頼固驍勇侮敵。欲決雌雄於一時。佞臣阿順。決其計。是以讒言不客。信房慨然曰。誘交戰者。未知其所終。言不利者。當決死於明日。蓋欲勝頼之悔悟而改之。翌日力戰數回。勇往奮擊。破敵之柵二層。部下卒死者十之九。諸將多中子銃砲而殞命。信房猶未被創。勝頼敗北之後。爲聚我散卒。少退。而復自河橋邊旋馬。對敵數人喚曰。我是馬場美濃守也。討取而具武名乎。敵聞之而近逼。信房未曾掉之。不敢按佩刀。而兵于馬上。時年六十二。初受築城之法於山本道鬼。而能窮其秘。嘗經營而遺之於實跡者若干所也。所謂牧島。清水。小山。諏訪原等是也。其餘據舊壘而變革陸池。附益關閣者猶多。且授其術於家臣早川晴幸。晴幸授之於小幡景意。今傳述于世者。皆其餘裔也。

出將入相。信房其選。神全氣定。行兵善戰。育材薦賢。邦家之光。忠諫不用。與國存亡。臨死安詳。可卜平常。
一、北海道里圖跋

貞享年中。有澤九八郎俊貞。著北海道里圖。鳩巢先生爲之跋如左。

九八郎俊貞。後改稱采右衛門永貞。其跋云。右北海道里圖一帖。賀人有澤俊貞著。賀城去江都一百二十里。里二千一百六十步。以一里三百六十步法數之。爲七百二十里。其道不爲近矣。而山川相阻。郵亭相因。率以淡旬而至。予自祇役江都。往反其間者。凡幾行。而道里之遠近。山川之處所。一皆茫然不復記其梗槩。嘗往往爲人所詰。乃有以自愧其用心之疏焉。將欲考覈審訂以爲一圖。而多事倉卒未暇是也。今斯圖也。所謂山川處所。道里遠近。一無所遺。而考覈審訂。能得其實。可謂旅裝囊中不可無者。俊貞少習兵法。好爲地里之學。不敢以一日而苟廢。其所定著。皆有可觀。吾知世之以兵法名家者。未之能或之先也。然賀之人士視俊貞。如凡人。莫能知其材且勤也如此何也。蓋重遠而輕近。貴耳而賤目者。乃世人之常態。自古以然。非獨賀人之於俊貞也。魯有斥夫子爲東家之丘者。有謂爲鄰人之子者。彼於聖人。且不略省焉。其他則尙何說。吾謂俊貞。其可以無恨矣。

貞享三年閏三月二十七日。室直清書。

一、太宰春臺の聖學問答

余近頃太宰彌左衛門名は純と云者の所著、聖學問答と題せる一書を見る。其說荻生が說を尊尙し、孟子心性の發明を始め養氣養心の說以下を破し、濂洛關閩の諸先生を蔑如して、其奇異僻恠の說、伊藤仁齋父子の上に出づ。東都權門の子弟其人を崇泰し、師儒を以待之、其書を刊行して當世に流布せしむ。於是世道の衰頹をも可默識焉。嚴廟の御時、山鹿甚五左衛門兵法を以て徒を聚め、聖教要録の編を著し、自ら孔子以來の一人と云。時相僉議あつて山鹿を千里の外に流刑し、其書を滅板せしめて人の惑を解しむ。誠に世教の一助而已。余謂。明成祖永樂一年、繞州鄱陽縣の儒士朱友季と云者、所著書を獻じ、専ら濂洛關閩の說を毀り、その醜詆を肆にす。成祖覽之怒て曰。此儒の賊也。大臣李至剛・解縉等法に置かん事を請ふ。揚士寄曰。當毀其所著書。庶幾不誤後人。成祖從之。則行人官をして友季を押し、司府縣官を會して其罪を聲して杖之、悉く所著の書を焚しめたり。其後王陽明が異說を造作せるをも黜罰せし

めたり。而るに明季に及て王世貞が徒出て、邪說暴行すれども度外の物にし、制止する人もなく、終に代と共に天下の笑となる。我國近世仁齋が徒出て、或は大學・中庸は聖人の書に非ずといひ、或は心性・道理の學は孔子の家法に非ずといふの類、無所忌憚に至る。實に異域同談と云べし。
一、大河内彌三郎及び日下源四郎の納諫

乍恐書付を以申上候。御當代別て御政務正敷、土民百姓等に迄迄萬歳を奉祝候。然るに此度金銀吹替被仰出候事、諸大名・御旗本は不及申上、下々に迄迄必至と迷惑仕候。江戸中は不及申上、日本國中の騷動不過之候。先年萩原近江守殿御勘定奉行の時分、四つ寶御吹改、厥後御停止被仰出、近江守殿一人の不調法に相究り候。其節世上の評判には、明君の驗し爰に顯れ候と、難有奉稱候處、今般の御吹替は何事に候や。上には金銀御藏に滿候。然るに事を御招と乍恐奉存候。紀州御領國の御仕置にて、日本の御仕置相違仕儀と奉存候。申さても紀州は小國、縱令無理成被仰出有之候共、五日・七日の内には國中鎮り可申候。日本の騷動は俄に鎮り不申候。先年御譜代御大名・御旗本衆を、大廣間へ被爲